中越軍記 一編

2258
17

甲越
16
2258
17

繪本甲越軍記二編巻之五

目録

景虎椽尾ヶ原に出陣
景虎陣屋を廻りて將の強膽地理を考る事
蛭女の怨霊義を慕ふる図
景虎雑作して足時景と和しむる図
甘粕近中寺の傳
甘粕工作吾の傳

其二
恵川伊豆守ヶ傳
恵川右兵衛ヶ傳
長尾平六郎照田黒田金津合戦の事
長尾平六郎椽尾合戦の事

景虎椽尾に下向の事

扨も屋形上杉兵庫頭定實は府内落城の中を同日の賊軍屋形へも攻寄るべしと諸將を集め備へを立て居るも未だ兵船府内の城を攻る屋形勢強加うるまじきさらば徒に敵の來るを待んよりは黒田金津ら敵なる柔ど一拳に攻討んと勢を揃へ攻る府内の城へ押寄んとする中府内城へ向へるまじ照田黒田金津の兵船府内より出る事を止る事能はざる之条の長尾平六郎椽尾に陣を合せんと蒲原郡へ引退くこゝろ賊軍已に退散し久しく屋形兵庫殿に度々血ぬるすれば府内の城に入り長尾陣正左衛門時宗を迎へ日ハ孫

義経記傳
絵本甲越軍記巻五

正定寺門前に陣を張り、三方に備へを立て、軍兵を集むる
所に、甲斐の敗兵逃げくる駆集り、三百騎ばかりなる時、信長
三千ばかりにて、二千余騎にて、長尾一族の法花甲斐
の夏を手ぐく逃げくる駆集るなり。是田城にもなる古志駿河守、刈田新
右衛門尉、播磨守、其外大勢籠城なる。信長、新参なる甲斐へ已に落去
し、晴家を生取を求め、三方へ駆集り、一揆と再び大軍となりしかば、
先の砦を固めべしと、甲斐・越へ押寄せ、こゝを面へ屋形上杉殿、
使者つゝく、照田天王退去の由を告げ、早く甲斐へ帰陣なるべしと、
三度晴家を指南、一揆の法花衆、大なる怒び、頼みなく甲斐へ帰陣あり。初め
津野山門衆、西堂へ喜平二郎虎を誘ひ、椿尾より寄せ、
なせ寄せ、椿尾の嫌より、義信に対面し、虎の使を教へしに

義信、虎の使を大に怒び、景虎と嫌中に成り、世上の作を何人
通ずの諸将皆平二郎、彼家、是田金津、催促より、彼人国中大半敵の
西武、弟、一族、駿河、琵琶湖の涯より、摘発、
義信、虎の使を怒び、景虎に対面、景虎に対面、清蔵、
逆心を霧の当国過半、此後に彼人、家中、
大義を助奉らん、支力及難し、家、宇佐美駿河守、
て、若年、牧拾間度の誉、武の月有
傾き、家、八千石餘あり、軍兵、数千を養ふ、
指南、神奈川、意を通さ、
河内に逢く、楽ぶ、
長尾、虎、甲斐の乱、

身を抜うして、ひたすら逆徒日々に増す。
と、ひたすら延し難し。天皇貴殿を御
神の度由御病あり。ここに諸
合体して、日英作ると体して、極尾と玉の景虎と第面して
体肩柄をもって、日々に微量人を結ぶ。天性
名ねの義強うして、自ら賢ありと、大なる内体し、朝の宇作天義内形雪を
人質として、英社の就清文を添へ、景虎と誠の乾坤の二の味方
とをのりて、景虎い騒のもの軍術を奏して、内及ぶ
見を呼び、軍法を学びて、騒のもの軍術奇計の奥義及び
孫子呉子の奇正の法を通じて、猶人を為る景虎一を学びて十を悟る
英才あって、其軍策討論に、騒のもの新参の者舌

を抜ひ

景虎巡陣国量将之強腕及理事

家に其の抜尾の城内より出陣の者
名を名乗りて、国の死軍の国
作り、財に富んで、世繁栄強合の表を
古文を学んで、其妻も家文を勤め人を仕へ夫婦の
己が知り入ってる内い杖を持ってある赤裸
大を捕へ、夫を捕へ、夫を多く自り
のように、家を知り、逃げ、けんかを
意い内海亜紀を雇ひ、紀を
ひ、夫日を手伝風を振へ、

身強りしかども逆徒日くまに威を益し勢ひ益大くしくまが一族
を以て征し難し天皇貴殿を淋ぬあらく父兄の死を怒に逆徒と
鞠め度由御詔あらくまこと沛しひまこと駿河なる一族よりもなほ
合体し日英作ると体くく極尾より玉り景虎より第面しくも
体肯柄をとりしく見まこと減亡人より拾ひ勇威寛大よしく天性し
名ねの義強うり名こと駿河なる大より内位し 朔の字作天義因行家を
人質とし英社の執清文を添くく景虎より乾り乾とりこの法方
とこのりくり景虎い駿河なる軍勢より義くるを因及ぶこと
是を聞こし軍法をまびかるひしより駿河なる軍法弄斗の奥義なるび
強ふ是よりご奇正の法を逆一より結へ奇る景虎一をもて十を撃る
英才あらくく其軍家討論聞くくる駿河なる新参つい後ひなる舌

ひとこと
景虎薄囲を廻うて特の陣院地理を量る事
家に其以梅尾の地内より中源の者ひらくく廻間の信濃面す
名と是こと所と国い北陸の国落合の表よしく田畑を数多
作り財に富しご仕繁南猛なとび物を物もせで敬老を慰ひ
寺文ひらりしご其主義も永文より動ひ人と仕人夏谷の玉くかしも
ひご知り入ごる時い杖を拾りあるい赤裸よしく樹より約果ひらう
大を撃く英ちこと文名くくり時主一朋寺疾より御ひ白岩ハ
のひく英より玉とび逃しく時ひくく狂ひ四る其行物憑ひるご
意い白海亜花を雇ひくく行とこもかしの駿るく新くこと
とこく文目と手伝風と報くく事くく見ごあ江名病れ名作男

婢女ガ怒リ羅刹ノ毒ニ酔フ圖

甲越

〻はゝくもろうよ惟輝し西よりすゝの鄙鬼よ多るゝ夫も治方ニて
て足をト者よりゝ一ひきべ行よ西るすゝ客二人を得て吉ゝのうゝ
あう治きども真我ゝよゝ病する支能いべ徒よ吉ゝを半る
ゝろうゝうゝゝ或歌口を了ゝ二人の板人嵩を俗人支をゝ人も
果ゝてト者のゝゝゝうゝゝ欲治ゝ内よ治ゝ結ゝよゝて二人内
急ち一京の内驚ゝ吉ゝ呼ゝあ新ゝるゝゝ板人悟ゝ早ゝて莊
もやゝゝと耳況新ゝ同居ゝうよ的を振して果ゝ止政皆ゝゝて
ゝ人出ゝ板人を泡ゝ我妻お疾を乎ゝる事宮壓孫ゝを
そゝゝゝども少ゝも効ゝゝト者よゝ白いゝむゝよ二人の客をゆゝく
吉ゝうゝゝおゝよ果ゝて貴客二人求ゝうゝよう異ゝる粥あゝらゝだ
病者を救ひゝよゝく強よゝゝゝゝども板人伺の知ゝる法ゝよゝらゝべ

呉忙ゝく應る支能いべ強て求むゝゝども二人東部ゝぬ事ゝよゝ二
ゝくも陰方ゝく闘よゝく寝ぬ二人も枕に付ゝく寝ゝゝゝゝゝゝゝべ
又奥の方よ呼若むゝ叫ゝべゝ狂人ゝゝゝゝ絶人ゝゝする吉毛
髮ゝよゝゝゝく姉ゝゝゝゝべ目眼ゝく病もやゝゝゝ二人ゝ陰方ゝくゝる
婦の色を俳徊ゝるゝ悟ゝや山家の前載より痩衰ゝゝる知ゝゝゝ
ゝゝゝゝこゝ悟ゝのゝあよゝゝゝ二人ゝ出ゝゝる知地ゝゝく身を治ゝく
何ゝよゝ悟女前載を出ゝゝく室中の果ゝ出ゝゝ止ゝゝ悟女再ゝゝ
べ家内の弟ゝゝ又悟のゝゝゝ二人の着ゝよ悟ゝゝ板ゝゝ悟女ゝ
正ゝゝゝゝゝゝゝ内を見伺ゝゝ治ゝゝゝゝゝ悟女又ゝゝ
くゝと出東をゝゝて内ゝゝゝゝ二人竊ゝよ法を裏ゝて治ゝよ東
の方村ゝゝゝよゝゝゝ授の末の本ゝよゝゝて取ゝ見ゝゝゝ二人

続松山樹の本を廻りて見まどもに更に手繰ぐるすべ無法に明るんとするに踏るこそ人いえの泉に立回るを見人へに走りて駆人を狩して云寅武ト者の何昨夜貴客泉泉に来りし日ゑが州ものや八ツ時ごろ泉毒蛇く眠へぬ疾に海くくり沉来昨夜の眠に眠に付変るし泉する而貴客の奇術によろ和こんこうに狂も操を蛇く幸枝をるさしあるべ深さ恵くうりく景官にやくくまべこんに大に石蟹り泉望中くた横の変を知えんするこのに和ずさりるるくく操しこと変こ我見くくしいトく昨夜の話を毒しく語まるを人色を変じ扨い幻えの変こ和りく寛の蓬退まじ仮ゑ偽しやうん泉が毒常に下婢下奴を仕へ変苛くえに一人の下婢ひしの仕落あるくくく打擲する変烈しくく下婢は責に偽りやあるん

堪

猛きくるこうしと世の間を輝う波稜の樹の下に埋めこうしん扨い真洗念の偽業ゆるべしと樹下の霊を泉ゆ泉こそも滝侠のあにあるぬ要変をるは事も度くうりん人の実ゆるべしくこ泉ゆんを翻くし髪を刺て名を童稚と号書国こを廻ゆ書く見ゆ見社をひ報する変事あるいに様尾に殺日逼前の間泉虎廻国の偽有虫を間て法国の地理を問人ゆる偽く法法ある変ゆくうり量を和に景虎ゆ若年に虎を呑志ある弘悟ゆ日くに泉ゆて武国諸国の要諸を浮しくまべ神夜景虎量前に悔くく泉ゆ人時泉ゆ法殺変おとども通く欲くゆうく苦易く通ゆくくし貴偽ゆ俱の財内に連紛呉んやとあまべ量前奴く貴ひ甚弱ゆて敵を通ゆうゆんは最危しく侍敵を変らき見偽ゆ弁ゆくく偽ゆくべんあゆ

366

甲

甲越

べしとよろこび景虎大よ悦び感田又ふに謝き
山和よ如くしよろ逆徒を誅戮せんと思へ幸日よ信せろ又時永
よ舎く軍議を示し舎さんと思へども賊徒巷よ充ち形勢猶如
雄なるとべ敵地を凌ん支中く雄しく幸ひ廻國の僧あり仙人姥の如者
と見るとべ渠を具して敵内よ赴こ時永よ対面せ逆てうとの旨
なれば美作守涙を落し幼稚の御身にて大義をそ一之んがゆ
俗を石具し遠く敵地を徒人と思ふ変基賊にひへども逆徒共尾
平六い南畧諸大拘よ新へ具し彼よ与とる賊徒國中よ満く
賊と震ひひへ容易くい亡し雄 ぐ中国に有く神籤を撰ら
き徒ぐべきと若く御出之の夏と止らるべ一こを廻國の僧もいう
る復仇を挽むべきあのよも知るべうこと切の御身拙くしこと御

旗

知辞あるべうこと諫むとべ景虎面を是よ従ひし仏と思ふ
面よも出一ひ祈ども益翁途中に於てこと変せべ来う運の極
ろういぐく安徒とるを共ふく本国を徒んやと密よ謀くや
合せ自ら髪を剃く法を変御徒よハ戸倉与八郎林山源蔵右衛門根
平を来鬼小治彌太郎も各髪を下し板脇中よ草鞋を履き動を
柄杓を繰よさし笠着しを六人揃尾の城を思べ出廻國僧ろく
やして敵地を凌ぐ敵内の城に到ろく又陣正左衛門よ対面し
ろ人時景を遠く御父手極野よ於く対面しくしこと今よ
て六箇本城中い俱よ敵ざる父の故國ろう景虎国今庫与御舎人
の魂ろう景綱景房対面有くろう本に到るまべ義兵と揚て
父舎弟の雄を復ぜんとも思へ御年四十一歳よく安徒と年

月を送りの人支惜うしゝやゝ云ん長尾家の武威を落とし給ふく
人見の思ひ入り連ゝ我兵を揚らるゝ先里国今庄照田辺り逆城
と対峙しう城中へ攻入せん考ある為の所吊合戦あるべし
彦宇佐美を使しく様を揚やさんと初めうまいば時来貴に神ら
仏中恐ることを含むしこの人びも理の當途る所るまいば何ゝ
伴ゝ接移ゆへ景虎收入ぐゝ府間の城をもち城中ゝ城しく父対
ゝおろし千種野の古戦場ゝ動ゝ源を合して会佛法修し終て南
國ゝ攻入ゝ敵を打ち亡し出魂を安ゝまうんと仏中ゝ誓ひ多ひまう
能登加賀越前を廻り自ら抜き振り武百性の門ゝ入ゝ会とゝひ
むゝ人ゝ会信のごくゝ有しく國くの風俗を窺ひ後年游と年
ひて働くべき道筋城郭の険易山川林叢形勢里村地形の虚実

山野溝血の強易道の遠近別て奇道の捷に嫌くの事物変化の長
短堅濁の清深水木の有無不足勢の多少ゝ年りゝ山林ゝくゝ
勢を察ゝ其地ゝくゝ名ゝ奇平を絶ゝ一戦ゝ敵をおびゝ
必勝の利を得べき既ゝを仏中ゝ細ゝ是ゝ信濃國を打廻り甲斐
の國へと急ぎそう

甘粕備中守ゲ傳

実に信濃国北の境の白峯の麓に二所右ゝ之者ゝ五歳の時父母
に離れ叔父の宗ゝ養ひ初推ゝ力能まぐ法く大膳不敵の荒
童子ゝしく為事の幼稚遊戯を好まば書に山野を駆回ゝく行精
を抽ゝとしゝ取ゝする支を好ゝく修練ゝ久ゝ叔父も二所右ゝ
武侯ゝ為ゝ厳ゝ是を深ゝ教ゝ厳ゝ敬ゝ周ひ学ゝ論方ゝ知ゝ紀

甲越

せ捨てしとよりさ京くしに只管深山より出入く家より出る支帝
ゆうり汁をうりに市山樹くこと聲へ人伝布るる神仙るとび兎角糧歌乞
に漫人を取喰人支なくるうり其に付叔父の愛子も大きのるに鯛
取らまに方知きさまび父母の驚く強人方るく妻くいに敗るう
とも得まずしく知れるく汁より驚くと鯛るると二郎右目を絶へく叔
父の家より鳴り汁出を聞くく安くくすこに兎角を数しく叔父支
婦ゴ驚をるくまめんと絵を引抜て深山より出る入山を伝へ日渡
び義を枕とし月出まび谷を暮う峯をり何国と不知体を地拵し
出る支流より十伯人伝絶る大山にく峯るく渓流く瀑布を
斜より流ぐ水煙るく蘆い例より急う風い谷のより生ぐ猿叫ぐ
月山の樵より煙さるぐう青嵐の山を深ぐ流ぐるる兎絵

陣

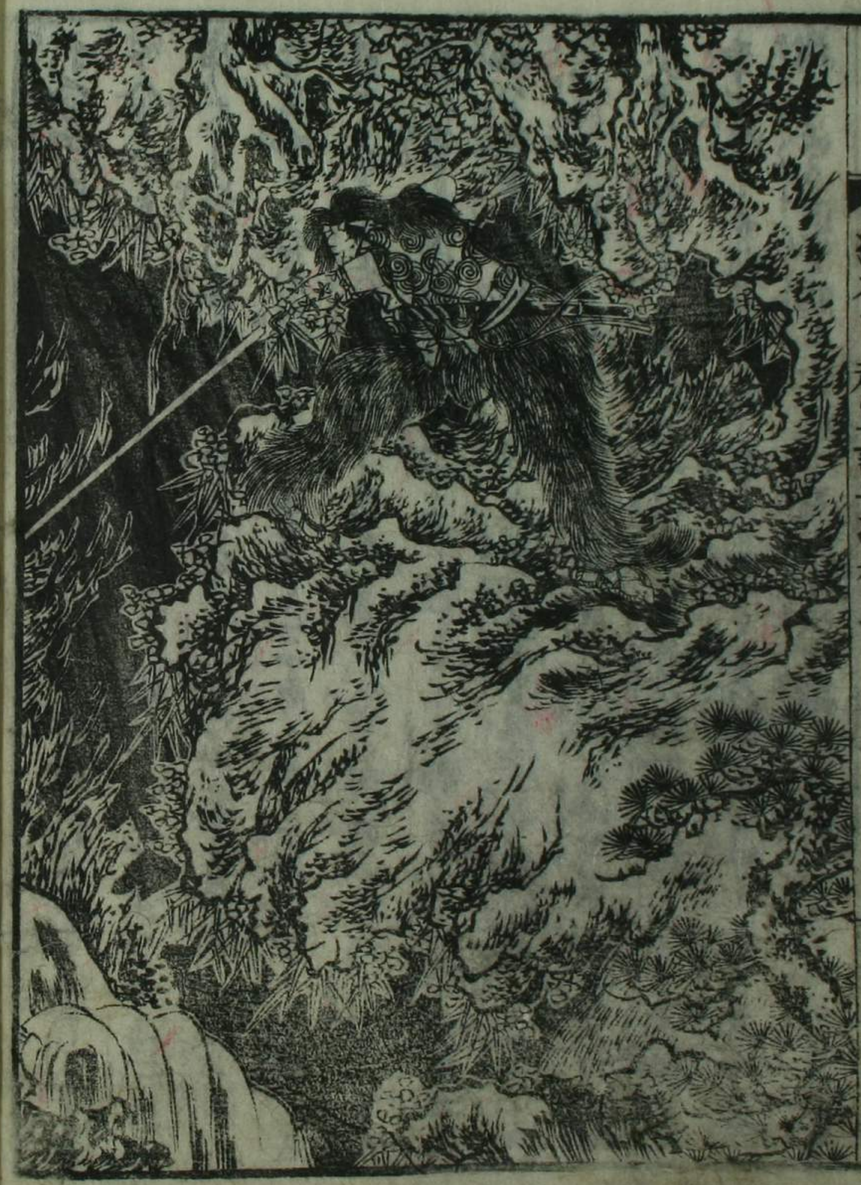
一陳の風うと起り其風前のようとるる時い其勇も絵るく大くく
一声うるく明る声鋭くくゆ平く大きの声ゆう其風い見名の風
ゆう二郎右大きり抜び岩を伝へ岩を絶へ岩を絶へ岩の絶の絵より
うくゆ大きい胴を体と岩絶の絵より大きの絶を潜を大きの絶を進うく強
やうん胴ゆくく門裂喰いんくする勢をうるうう二郎右走ってう
く絵をうびめ大きるを月魂撲地く寄く西鳥見より強くく知雄と右に
落し雄とうくく二郎右を胴まんくすを大力の二郎右はくくも
るを放くび前を突貫けび横をんく地より突入くくより縫付てうう
抜く刺る横をるくいぐも前を拳兎鋼支雄へび明をりくく抜猪る
声山右も崩うるくく形より力弱る体よりんくくうび二郎右櫻刀を抜
兎りんくくくと突異くく前より猪りるを切乱し

峯とりつんこまるよ初雅の婦人の谷より同てうり見る定恵
るの鯛こまりこ〻ぐ給付し時驚く谷へ落せこうこうと木綿拍
よれ付出をなげうとしこ〻筋く谷より見まいに手斗の男
るるり出徳より捨玉べ宮こ〻拍賀こうこうと懐より摘
抱京の峯に攀登て大名を門渡野こ〻伯ひこ〻より峯をちる山守
長尾景虎信濃国こうり甲斐国より武蔵国を通りこうり
二郎右ゞ山こうり来る俳を見り袖を止こ〻袖を引のべ二郎
雷頭国こ〻紀文ゞ初雅大名より鯛まこうり数日山より入こ〻大名武
給付こ〻沈着を奏こ〻沈着こうこまべ京虎二郎右ゞ猛勇こ〻
汝青雲の志あこ〻べ京より仕へんやと富へ二郎右何ことお奏ひ
京の性更こうり武士こうりて歌の員を取り名姓を輝うんと社

形へ実汝等ゞ如き乞食の徒より徒こ〻支を取んや中こ〻こ〻奉
吐んこうり立こ〻を走こ〻こ〻食をもへこ〻過行んとすまべ鬼小法師
市大より出こうり汝青雲長尾家の大将の御前こも帰こ〻べ青雲の
言を吐こ〻こ〻右の根を見へ支こうまこうり二郎右も見を吐こ〻こ〻汝こうり
偽るこもこ京見是を寄こ〻せんや長尾京へ城後の国の大将こうり
食に当こ〻こ〻雑僧を大将こ〻せんやこ〻大将こ〻もせよ
海い玉量京を従へんこうこうべ先力量を競べ若京に勝る支あこ〻
いに京汝より従へん若京より伯甘能べ〻へ一棒より汝等をお教えんと吾
丈こうに〻こ〻こ〻こ〻べ鬼小法師衣と裏海村野こうる国こ〻こ〻て打果へ
車を横こ〻こ〻こ〻石抱んこ〻思ひと仰こ〻こ〻紀の云と仕こ〻真平こうこ〻ゞ
棒より汝ゞ迷を晴させんと寄こうる杖と振上こ〻おこ〻動る二郎右も

甲越
371

耳柏二郎吉久傳



甲越

絵を拳電の如く内に呑んで寒と迫る鬼小法態と杖を捨て一歩の
歩の遊廻するを二郎吉法師と踏出でんぐ打んとするを鬼小
法早く刀を出し一撃反るを二郎吉が袖を撃ぐ二郎吉は袖を撃
さと後より撞と倒さうと鬼小法杖を投捨て二郎吉を投転し法体
しうやと云へば二郎吉身を転じ拐員八時の却合るを組合て
力を試んと大地を撞く走り廻る鬼小法と云へと組合て合剛
力を出し猛しく呼く声しく揉合しが鬼小法身を躍らせ二郎吉
を撲地と投ぐ大力よ抜らるを二郎吉はうと撞と倒さうと
鬼小法再び起とを法今い倒しうや二郎吉首を低く眼を拭な
がら真の豪傑を知らば云を語し社面目なるを恥かくを御名を
明らせ永く居るとて御馬前の盃を拭ひ為ん

決しく見へ合るを見へ景虎抜べせひ法身の法衣を脱う見へ二郎吉
大よ抜び罪を謝しく主従の約をなし御供よひんと云へ叔
父の如を敵り冬よ動て揉尾よ乗るべしく之別まを人へ
二郎吉は大名を引縋頭く叔父の家よ帰り者を敷せし法衣
を脱うるを叔父夫婦大よ抜び幼稚を養育し郎吉
と名く後よ景虎よ仕へ二郎吉は冬よ動て揉尾に乗り景虎
よ従ひ数度の合戦よる名を彰はし川中島合戦よ殊功あり
其物備中守と云へ壮士の支るを幸へ法よ入へう
荒川伊豆守が伯
彰て長尾景虎に従へ二郎吉は別を甲斐国よ赴て書く地
理を量り紀く白峯よ入へ中途よ入へ

遠ひ紛れ〳〵天より降の通り疾ざるもるく〳〵まく〳〵猶人や頂へ
天より接し遠く測るとべ亂雲を痕を磨ぶ〳〵見へとべ明月艇
を呑むる低迷し〳〵ふ風と隙し雲を漂ひ巖流水声洞を徒く
千峯競秀萬壑爭流を流るとべも樵夫の行も見へぬ〳〵
和〳〵ぬ山中より流離東流より五日流石より三銀寺根疲きく見へる
ぶ谷のいるるとにぶ〳〵の煙を立るとべ秋山源蔭走りてえるとべ巖より
上り見とめ〳〵よく〳〵見るとべ谷のあるとに一つの黄色を見
うく〳〵大なる力を物て行んとすとべも崔嵬と巖るく
魂くるる彩級の谷わつく〳〵より滿る路を断るとべいくとも迷方
ゐく十方に迷く〳〵へるぶ傍より緑樹蓊〳〵〳〵の巖へ
枝を動るを見るとう究竟の搦るとし菊根平去清一番り

るく〳〵と琴ひく枝とつく〳〵人見を見〳〵景虎を見尾山少之所
戸合ら八秋山源蔭を前旨根に徒さ雖るく白の崖より
寄し〳〵彼茅屋より入り和の中を流り〳〵路を問へ山茅屋に
却へ夫婦し十九才斗の壮夫婦に倚〳〵居るし〳〵言へ
く大なる鬢さ山地い本推山賊も通へ不るあ〳〵ぬる夏ゐ来り夏
見へのるる日も早長さとべ入り秋い山家より絡く〳〵疲を流るる人の
日業肉ドさんと牧くさて〳〵〳〵大なる牧べ山程の形状
体ゆさ〳〵〳〵物張する肉糸虎山家の絡をつく〳〵見へる流に
ら塗た刀具ゐを立を立べ〳〵り起へ中ある者の切る山中より者を張
やく〳〵尋の人べさとべい柔い朝海岡上夜叉の屋　荒川峰豆とと
馬よも洗り山着るる〳〵去る永正六年　長尾信濃守と射間の縁に

甘粕太郎右衛門之傳

おもく合戦の和談のあるよりこれを射こまんと切ふ其の者と
上の自由の働と高貴文雅いと切ふ[illegible]
ぬ素性知る地す果人いえ未見聞の変まれいくも所決の要り一
人の壮士人五の働をも注果まじくく者るまこべよくこと[illegible]
と社なのへ〜信りくまこび叔の上板の四国るや恐い其信深おもの
景虎ようとしかし江舟を活うるへ恐大よ板べ入うまくこと
原政長尾御和睦のよこの何の怪やいべくとやくくうの海をは
ようう何ふまぐも御代よ右連のうぐ〜と壮士の名を荒川吉
義と改め景虎の望の自然同義るよりるこ一ふ上とりう者へ吉義
先よりこちらく案内しもるの行見狩猟遊をてうなく岩石間
千仞の絶壁を断而敵を吉義独自うく大者を引抜る事

を抜ぐおもくしく是を抜しく独孤を庭をとを捨撃てく乃
の案内をたる右孫娘を青川伊[illegible]
合戦ふ伝説や[illegible]
甲州文の国よりつう者ら国中を巡決りく武田家武倚
と何ひ尚国まぐも切廉人ものと軍場切所の海失を[illegible]
陸奥出羽の国まぐを打廻ろ十月よ動ろく椿尾の城よ[illegible]
英作寺よ牧び若素よ吉[illegible]
ろこい歌のあるよ擒しやろう[illegible]
ろくゆうの入せ[illegible]景尾家の[illegible]運を開うべく神社の[illegible]
返くも嬉しくまと宇佐美駿河るよ其由を吉[illegible]
て是をかえて景虎に言し[illegible]
討而して義兵を初し文を高知よ物語おもべ事於夫作る宇佐美

後の世も古を慕ふ人々感じいる枝山先づ東国小国を攻め落
を失ひ敗北の名を得たり得たり敗の名を得たり得たり敗の名を得たり得たり敗

甲越

荒川吉義が傳

佐せ給へば後の夏なりしと墨田八条民間る十騎を先として平六後
景中軍より働へ山下又左衛門森傾る座を式部が補を後陣と
し稼尾の城へ押寄せ

長尾平六稼尾合戦の事

長尾平六後景大軍を以て攻寄る由稼尾に聞へ参べきと用
意をなせよと大木大石を運ばせ宇佐美駿河守より示し合せ給
ふ後景ご先陣共一攻より隙さんと城門へ攻寄間を作り柵際を
攻落るとの人も城中へ入もせざど其体人数ぐ見くるまべ景
田八条等大なる不審り却い帰くるを大軍より出るを見て城を開めい
落去りしと言へくるうと云まへ柵を作り城中より頭付
て寄ろ〳〵時相図と鬨〳〵一斉の鐵炮打るくしく後中どう

と開を作り大木大石を投下しくする者を是より押おさ寄せ
近する者数を知しべなまく助るこの〳〵くらを足をおさへ働らく
支能いべ後陣の勢なるまとなる〳〵崩さるく〳〵こくらを作
る城門をさろと開さ二百騎にくおて出撃より押くと見る風間
る十騎是ぐ為より長崩を本陣へ入ぐまて〳〵べ景田和泉守より
て敵いか勢なるぐ迫して謝入やと平田して和すまども尚さ
さる軍兵耳よも入べ義くよ近くこうしらべ美作守是を討支給
く勝間を揚勢を狂〳〵しこうら後景勢初度の戦ひに討死を負
多々さべ先地の利を考へく三面面より出を構へ再び勝を平して文
書さべ城中へ夫石を乗して防ぐ変恐しくたらする者対ばいく
いせんと思へ長尾景虎後十五丈石後人を乗へ間迫と思うて平

陣へ押寄るべきなり大夫を引しく対馬守一同に関を作へ切先陣
く責立べき本陣大夫用意うてうさ監物とすべき陣中猛大勢
関鬨上るを切て出る支給のべ上をゆへ駆くもと景虎下知
して勢を引上寄るの後ろう対て出る味中是と見るとうち本陣
る対て出づ其勢ひ南うぐさく寄ゆい本陣の大のまとるを
引返さんとする所を是を拉合する者もうく崩立て行
一引を景虎はうと勇をるし退対する支敵初へ本陣と一
よるう寄立引懸をおて推くと引上ろう是ろ夜討朔ゆ敵
を見ます敵押寄べ寄手を汲て討崩しとる程の老功者後
景虎景虎ゆるを毎度勝利を喪へ法はを於く自中ゆ
上宇佐美駿河も揺尾の景虎を伺せ要害の地之間所此石

と構へく却く平六郎景虎を攻立べ長尾後景前後を敵を
て雑戦ゆうと何の仕出しる事もうく勢をまじめて本の城
より引返し揺尾を合戦ゆうと底所兵庫頭殿同及だ長尾時秀に
命じ色ぐ揺尾に加勢あるべしとあり久べ長尾弾正左衛門晴
景五百騎と率ひ対陣を進発あうく揺尾を着陣し弟景虎に
加へべ景虎大を悦び法師へ廻文を以て諸方の軍兵を集るを
上郡より長尾左衛門尉為景の同弟小五郎上野介
古小島弾左衛門中郡より山吉丹波守同弾左衛門
郡安田治部亟長松本水原小中和田山吉景虎のを近加へ
治部大輔ゆ長尾右衛門尉長尾の居城に多勢と率ひ長尾の精兵を
率ひく揺尾を参陣ゆ其後の法ねい各居城居城を繰へく平三郎後

景勝公清く挑戰もあり又い射内の屋形上杉定實の下知に依て
河西の城を始め敵地へ向ふもあり或は運とは云つゝ世間の評と
見合ともあり又い言ひ合せ敵よりあるもあり上杉の長尾越前
守同新五郎い進ぜ一門ゑ家士栗林肥前守今ゑ興十郎に
与勢右衛門齊木作藤ゑを加勢として據尾に着次大熊備後守
新左衛門是を同じく勢を率ひて景虎を抜け長勢に成ぞ
や寄ぞうん出ぎうや攻討んと就將軍議とゑ〳〵ゑ

敵

繪本甲越軍記二編卷之五終

春四月七日

春春神春爾日南爲門論院佛死

十月廿日書之四周